

# 1. アイヌ文化の始まりとチャシ

## アイヌ文化の全体的な特色

地域産業  
国際理解

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



伝統的な「コタン(集落)」のイメージ。

(帯広百年記念館蔵: 1)

12～13世紀ころを境にして、北海道に住む人たち(アイヌの人々)の文化は、それまでの「擦文文化」から大きく変わっていきます。これ以降の文化を「アイヌ文化」といいます。

自然の中での植物採集、魚とりや狩りを中心とし、かたわらでヒエやアワなどの農耕が行われる、という暮らしは、擦文時代の時と変わらず続きます。

しかし、縄文時代からおよそ1万年の間使われてきた「土器」( p83) がなくなっていき、煮炊きには鉄のなべが使われるようになりました。

鉄製品は、本州などから交易で手に入れ、そのまま使ったり、加工して作り直したりしました。  
( 擦文時代 p102、 縄文時代 p84 )



アイヌ文化では、床をほりこまずに壁を立ち上げた、平地式の家(チセ)がつくられた。上士幌町「東泉園」。(上士幌ウタリ文化伝承保存会)

### 床をほり下げない「平地式」の家

北海道の家については、地面をほり下げて床にする「竪穴式住居( p85) 」がつくられなくなります。

かわって、地面は平らなままで垂直な「壁」を立ち上げた「平地式住居」が作られるようになるのです。ちなみに、アイヌ語で家のことを「チセ」といいます。( p130)

また、擦文文化では作られていた「かまど」が作られず、家のまん中の炉になべをつり下げて、煮炊きをするようになりました。

### 交易の民

擦文文化以前にも、北海道以外の地域との交流があり、物や文化の行き来がありました。アイヌ文化ではさらに交易がさかんになり、アイヌ文化の内容にも大きな影響をあたえました。

本州やサハリン・大陸へは、コンブなどの水産物や動物の毛皮が送られ、本州からは鉄の道具やうるしぬりの器、木綿の布などが、大陸・サハリンからは絹や綿の服にガラス玉のかざりなどがやってきました。

また、北海道のアイヌ民族は、北の産物を本州へ、本州の産物を北へ送ると、「中継基地」の役割もはたしました。



ユクエピラチャシ跡(陸別町: p117)で見つかった中国銭「皇宋通宝」とガラス玉(身をかざるもの)。交易によって手に入れたもの。(陸別町教育委員会)

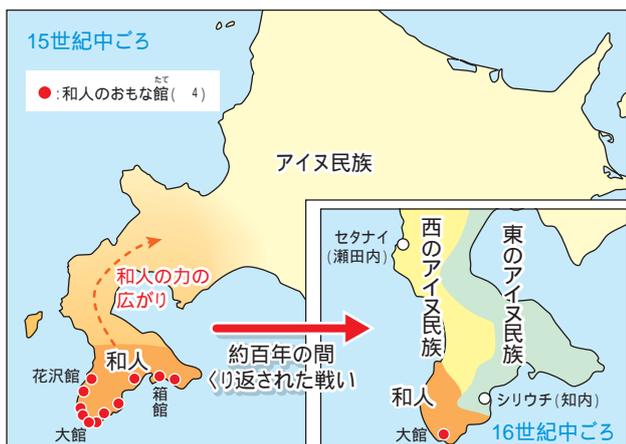
1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

2 竪穴式住居(たてあなしきじゅうきょ): 同じアイヌ文化でも、サハリンやウラル半島より北の千島列島では、竪穴式住居がつくられていた。

# アイヌ文化の広がり



3つのアイヌ文化と北の民族文化。それぞれのアイヌ文化の中にも、さらに地方によるちがいがある。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)



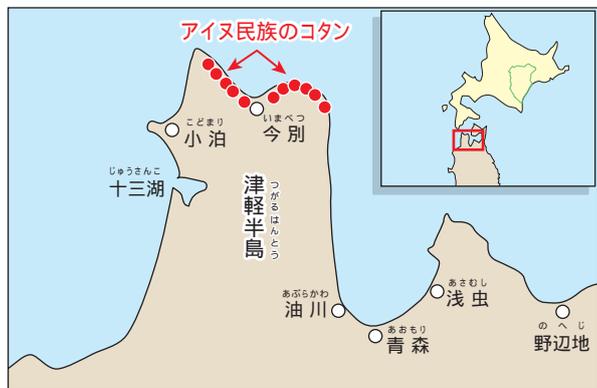
(左上)15世紀中ごろ、和人たち力がのぼしていた範囲。  
(右下)16世紀中ごろ、和人(蠣崎氏)との話し合いで定められた、道南、渡島半島での境界。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)

## 青森県にも暮らす「アイヌ民族」

13世紀には、「大和の国」の支配が東北地方にまで広がっていましたが、アイヌ文化が本州から消えていたわけではありません。

17世紀、江戸時代に入っても、青森県の津軽半島や下北半島には、アイヌ文化的な暮らしを続けている人々が、コタン(集落)を何カ所も作っていました。

だんだんと弘前藩や盛岡藩の支配が強まり、また、和人の移住が進むなどして、伝統的な暮らしができなくなっていきますが、少なくとも江戸時代の終わりまでは、その伝統が残っていたようです。また、この地域の和人の文化にも影響をあたえたといえます。



●:江戸時代前期(17世紀ごろ)、津軽半島(青森県)でアイヌ民族が住んでいたところ。「今別」「野辺地」「十三(もともとはトサ)」などはアイヌ語からきたという。 (『アイヌの歴史と文化』より、改変)

12～13世紀ころ、北海道ではアイヌ文化が花開きました。アイヌ文化と一口にいいますが、地方によって、ことばやししゅうの文様など、さまざまな点で異なります。

アイヌ文化は、サハリン(樺太)でも成立しています。また、ウルップ島より北の千島の島々にもアイヌ文化は広がりを見せています。

これらサハリンや千島のアイヌ文化は、北海道の文化との間にちがいが見られました。(クナシリ[国後島]とエトロフ[択捉島]は、北海道のアイヌ文化にふくまれる)

例えば、サハリンのアイヌ文化では、木の人形をお守りや祈りに使うなど、ニグフやウイルタといった、サハリンにいたほかの民族とのつながりがありました。また、千島のアイヌ文化は、海での狩猟を中心としたものだったと考えられています。

## 和人との戦い... コシャマインの戦い

12～13世紀ころになると、それまでは「エミシ」と呼ばれ、擦入(アイヌ)文化が強く残っていた東北地方北部までが、「大和(日本)」の支配下に入ります。

やがて、北海道南部の渡島半島では、津軽の豪族・安藤氏の家臣や本州からの移住者(和人)が暮らすようになり、「館(砦)」を持つものも出て、支配地を広げていきました。

1457年、コシャマイン率いるアイヌ軍が、和人たちと戦います。コシャマインは、ほとんどの「館」を破りますが、花沢館の武田信広に殺され、アイヌ軍は敗れます。

その後の約百年間、何度も戦いが起きます。その結果、和人の支配地(和人地)は渡島半島西南部に限られます。

3 安藤氏(あんどうし):津軽(つがる)地方を支配した武家・豪族(ごうぞく:地方で勢力や支配力を持つ一族)で、羽田国秋田郡(でわのくにあきたぐん)までを支配した。室町時代中期以降は「安東氏」とされる例が多い。( p111)

4 館(たて):和人の砦(とりで)であり、その地域で支配や交易管理の拠点ともなった。  
5 武田信広(たけだのぶひろ):コシャマイン軍に勝ったのち「花沢館」の蠣崎(かきざき)氏の養子となる。蠣崎一族はしだいに和人を従えていき、子孫が松前氏となる。

# アイヌ文化期の自然のようす

環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



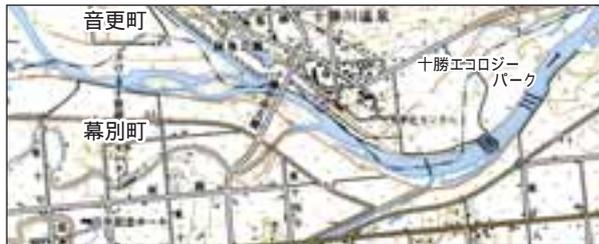
今の十勝の林。かつては、今よりもはるかに太い木が、はるかに深い森をつくっていた。今ある林のほとんどは、一度切り開かれている。

アイヌ文化が広がったころの自然は、明治になって内陸開発が始まったころと、ほぼ同じすがたをしていました。今では開発が進み、十勝のほとんどの場所で、もとのすがたを見ることができなくなりました。

石狩山地や日高山脈に囲まれた十勝平野の台地には、カシワやミズナラを中心とした広葉樹の大木が、大森林をつくっていました。森の地面には、落ち葉が重なって土にかえり、さまざまな草が育ちます。

積雪が少ないことから、エゾシカが冬をこすため、群れをなしてやってきたといえます。( p145 )

川岸の肥えた土には、ハルニレ、ヤチダモ、キハダ、オニグルミといった木々が深い森をつくり、シマリス、タヌキやフクロウなど多くの動物が暮らしていました。



(上)人の手がほとんど入っていない十勝川中流(明治29年発行の地形図・着色)。(下)最近の同じ場所(平成12年発行の地形図)。

## 曲がりくねり分かれる川

今では、川は堤防の間をほとんど1本の川すじで流れていますが、これは人が作り上げた形です。

もともと、平野を流れる川は、両側にある丘(段丘)の間を大きく曲がりくねり、あるいは何本にも分かれていました。

大きな洪水があれば、湖のようになることもあり、それまでとはちがった流れにもなりました。そんな時には、草木も流されますが、洪水が引いたあとには肥えた土が残され、新しく豊かな林をつくる土台となりました。

十勝川下流の平地には湿原が広がり、春になると本州で冬をこしたタンチョウがきて、子育てをしていたことでしょう。

(地図は国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(止若・十勝池田)を使用。70%に縮尺)

## 川にあふれるサケやイトウの群れ

曲がりくねる川には、深いところや浅いところ、流れの速いところやおそいところなど、いろいろな状態ができます。また、森が岸をおおう川には、落ち葉や虫が落ちることでエサがたくさんあります。

アイヌ文化が広がったころの川には、さまざまな魚がたくさん生きていました。春にはそれまで深い川底にいた大型のイトウが、卵を産むために上流の浅瀬へ向かいます。中には1mを軽くこえるものもいました。

また、秋には海で大きく育ったサケが、きれいなわき水の出る場所をめがけて、産卵しにやってきます。かなりの数だったようで、「かつては、小さな川では棒がたおれないほどだった」という話も伝わっています。



川をさかのぼるサケ(猿別川・幕別町)。

1 広葉樹(こうようじゅ): カシワやカエデなど、広くて平たい葉をもつ樹木。北海道の自然林の広葉樹は、冬になると葉がかれ落ちる「落葉広葉樹(らくようこうようじゅ)」。  
2 多くの動物(おおくのどうぶつ): エゾオオカミやニホンカウソウなど、今では絶め

つした動物もいる。  
3 ささまざまな魚(...さかな): チョウザメは昭和時代に十勝からすがたを消した。( p93 )  
4 アイヌ語で自然と出会う: 参考図書「アイヌ語で自然かんさつ図鑑(帯広百年記念

## アイヌ語で自然と出会おう... 身近な存在としての自然

多くの生き物にアイヌ語名がついていて、人とのかわりが深いものには、とくにくわしくついています。

植物でいえば、食べものとなるギョウジャニンニクは「ブクサ」、オオウバユリは「トゥレフ」、また狩りの時、矢の先にその強い毒をぬったトリカブトは「スルク」といいます。

動物では、食べものや毛皮をくれるエゾシカは「ユク」、キタキツネは「チロンノフ」(私たちがたくさん殺すもの)といい、大きくて強いヒグマは「キムンカムイ」(山の神)と呼ばれていました。

川の魚では、サケのことは「カムイチェフ」、つまり「神の魚」といい、これも大切な食べものであるイトウは「チライ」といっていました。(魚の名 p119)

フクジュソウは、十勝では「チライムン」といいますが、これは「イトウの草」という意味です。春先、フクジュソウが花を開くとイトウが川をさかのぼってくるので、漁を始める合図としていたのです。

上士幌町の「東泉園( p120・p129・p131)」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、十勝のアイヌ民族が利用してきた植物を育て「アイヌ植物園」をつくっています。

大雨による土砂くずれにあうなど、多くの苦勞をしながらつくり続けられている、とても貴重な場所です。



「トウレフ」 オオウバユリ。



「チロンノフ」 キタキツネ。



「チライ」 イトウ。  
(飼育: 幕別町ふるさと館: 5)



「チライムン」 フクジュソウ。



「アイヌ語で自然かんさつ」。帯広ひゃくねんきねんかん百年記念館(6)による観覧会。  
(十勝千年の森・清水町羽帯)



「東泉園」(上士幌町)の「アイヌ植物園」。

注: この本では基本的に十勝地方のアイヌ語名を紹介しています(他のページでも)

## 目で見る自然の大変化... 植生図でくまべる十勝

右の2つの図は、どんな植物が生えているかで色分けをした「植生図」です。

左側は、もし人が自然を変えなかったらどうだったか、という図で、右側は今のようすです。

小さくしているので細かい分け方はわかりませんが、それでも、今の図では、オレンジ色が目立つことがわかります。ここは、畑になったところす。

また、緑色の部分も、よく見れば色が変わっています。さらに、同じ色のままでも、木の太さや生え方が大きく変わっていることがあります。



潜在自然植生図。もし、人が手を加えなかったら、という植生図。



現存植生図。今のようすはどうか、という植生図。

「北海道現存植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・奥田重俊、国土地図、至文堂、1988

「北海道潜在自然植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・鈴木伸一、国土地図、至文堂、1988

館)=十勝のアイヌ語名をのせている。「アイヌ植物誌(福岡イト子)」=十勝の名前とは異なることもあるが、利用法、伝説、著者の体験など、とても興味深い内容。  
5 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田384-3(依田公園横)

電話 0155-56-3117 月・火曜日休館  
6 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

# 川を見下ろす「チャシ」



ユクエビラチャシ跡(陸別町)のある高台。下を流れるのが利別川。

16～18世紀ころ、見晴らしのいい高台の上に「チャシ」が作られました。

チャシとは、高台の地面に1本から数本のみぞ(壕)がめぐらしてあるところで、使われていた時には柵で囲まれていたようです。

何のためにつくられたのかは、はっきりしていませんが、伝説によると、アイヌ民族同士や和人との戦いのための砦、あるいはカムイ(神 p 134)が舞い遊ぶ場所、見張りのための場所、争いを収めるための話し合い(チャランケ)の場所などに使われたと伝えられているようです。狩りのためではないかという考えもあります。

第1章 十勝の平野や川ができるまで  
第2章 先史時代と川  
第3章 アイヌ文化と川  
第4章 十勝開拓と川  
第5章 発展、そして未来へ



## 十勝のチャシ

チャシは、日高地方より東の太平洋側の地方に多くあり、十勝では72カ所のチャシのあと(チャシコッ)が見つかっています。

十勝のチャシのあとは、海ぞいにも何カ所ありますが、そのほとんどが川ぞいの高台にあります。

十勝川と利別川(とその支流)で多く見られ、一方、音更川には4カ所だけ、札内川では全く見つかりません。



また、十勝川では芽室町より下流部に多く見つかりますが、利別川では、中流～上流部の本別町・足寄町・陸別町で見られます。

十勝川温泉チャシ跡(音更町)。十勝川ぞいの十勝エコロジーパークにつき出ている。

## 本別町「シンコチャシ」の伝説

『このチャシはとても見晴らしがよく、この地に侵入する者は、すがたをさらさなければならなかった。』

ある夏の日、利別川の上流から、フキの葉がたくさん流れてきた。実は、釧路の戦士たちがフキの茎(つつになっている)をくわえて呼吸しながら水中にもぐり、本別の人たちのウラをかこうとしたのである。

しかし、本別の首長はこれを見破った。ウラをかいたつもりの釧路の戦士たちは、逆に本別の人々に待ちぶせされ、囲まれ、一人を残して全めつしたという』

(本別・清川ネウサルモンさんの話 = 目黒治助氏記録)

= 『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より、意識・改変)



シンコチャシ跡(本別町)のある丘。下を流れているのは利別川。

1 72カ所のチャシのあと：北海道教育委員会に登録されている数。すでに完全にこわされていたり、伝承などはあっても場所が確認できなかったりするものをふくめると、およそ80カ所となる。

2 チャシコッ：「チャシのあと」という意味で、地名にもなっている。豊頃町にある安骨(あんこつ)は、もとは「チャシコッ」に当てられた文字だったが、あとで読み方が変わったもの。もちろん安骨にもチャシ跡があり、「安骨チャシ跡」という。ただし、

としべつがわ

## 利別川が見わたせる高台 ... 陸別のユクエピラチャシ跡(国指定の史跡)

りくべつちょう

陸別町の高台には「ユクエピラチャシ」のあとがあります。16世紀中ごろつくられたと考えられています。

としべつがわ

利別川を見下ろすガケの上に、みぞ(壕)がかなり深くほってあります。みぞに囲まれた場所(郭)が3カ所あります。

今でもかなり広いチャシあとなのですが、もともとチャシがつくられた時には、今ほどガケがくずれておらず、もっと川の方に広がっていました。

当時としては、大きな工事だったようです。

また、みぞをほった時に出土した大量の土は、みぞの外側に盛られていました。

盛られた土の一番上には、白い火山灰

が積まれています。できた当時には、チャシの外側がはば広く(18m以上)白くなっていて、かなり美しいチャシだったことでしょう。

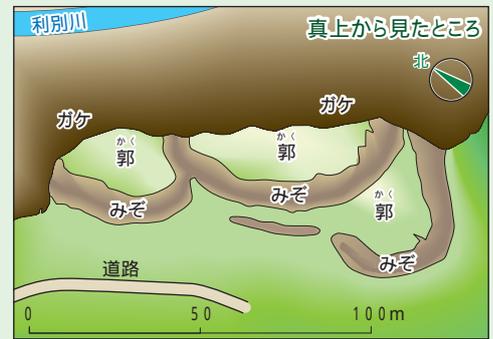
「ユクエピラ」とは、「シカ・食べる・ガケ」の意味です。発掘調査では、多くのシカ(アイヌ語で「ユク」)の骨が見つかっています。



ユクエピラチャシ跡。公園整備がおこなわれている。みぞやガケでケガをしないように。



ユクエピラチャシ跡の位置。  
陸別町字トマム2番地2



ユクエピラチャシ跡を上から見た図。  
(参考:「史跡ユクエピラチャシ跡発掘調査概要報告書」)

### ていねいにつくられたチャシ ... ユクエピラチャシの特ちょう



ユクエピラチャシ跡から見下ろす利別川。



盛った土の断面。色ちがいの火山灰が交互に積まれている。

(写真:陸別町教育委員会蔵)

としべつがわ

### 利別川を見下ろそう

昔とは流れが変わっていますが、今でも利別川を見下ろすことができます。サケなどがのぼってきた時、あるいは、よその人(敵かも知れない)がやってきた時、すぐわかる場所だったようです。(ガケに近づきすぎないように)

### かなりの手間がかけられている

土を盛ったところを調べてみると、白色とオレンジ色の火山灰がたがいちがいに積み重ねてありました。かなり計画的に、手間をかけてつくられています。

### たくさんのシカ(ユク)の骨

たくさん見つかったシカの骨は、単なるゴミとして捨てられたわけではありません。自然のめぐみはカムイ(神:p134)からいただいたものです。アイヌの人たちは、カムイへの感謝と願いをこめて、その霊をカムイの国に返すという気持ちを持っていたのです。(「捨てる場所」p94)

もともとの意味からすると「安骨チャシ跡」だと「チャシ跡・チャシ跡」となってしまう。

3 火山灰(かざんばい):火山からふき出したもので、マグマ(地下にあるとけた岩石)が粉々にくだけたもの。木や紙などが燃えてできる灰とは異なる。地質学では直径2mm~1/64mmのものをいう。どの火山のいつのものかによってちがいがある。(p58~61)